



研究室紹介

文学部 地理学科

SHIBATA Atsuki

芝田 篤紀 講師

大阪府生まれ。奈良大学文学部地理学科卒業、京都大学大学院文学研究科地理学専修修了、博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(DC2)、京都大学学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育研究ユニット研究員などを経て、2021年本学着任。論文に「ナミビア北東部ブワブワ国立公園における住民の生業活動と植生の関係」(『地理学評論』91(5):357-375, 2018年。*日本地理学会 学会賞受賞論文)ほかがある。

自分の目と機械の目で地域をみる

私は現在、地球環境問題に関係する研究を進めています。具体的には、人工知能による海洋ゴミ識別モデルを開発したり、ドローンによる空撮やその画像解析等を行ったりして、海岸の微地形や海浜植物と漂着ゴミの関係について明らかにしようとしています。また、重視している現地調査では、様々な地域の砂浜を観察したり掘ったりして、海岸に埋もれていくゴミの存在について解明を進めています。このように、自分の目で現場を見ることを大切にしつつ、ドローンなど先端科学技術の機械の目で対象を捉え、環境問題を少しでも解決したいと考えています。

アフリカでのフィールドワーク

地理学者として、現在も調査等で海外へ行くことは多いのですが、特に大学院生時代は、南部アフリカの辺境地域に住み込んで、自然環境と住民生活の相互作用性や共生の在り方について、研究を進めていました。自然と密接に暮らす狩猟採集民が周辺の自然環境をどのように認識し、利用しているのか。また、人々に認識される自然環境は実際にどのような構造で、いかなる影響を受けながら成立しているのか。それらを解明するために、数ヶ月間、テント生活をしたこともあります。このフィールドワークの経験は、現在の研究のみならず、教育の中でも大いに活かされていると感じています。

西日本で最大、地理学を学べる場所

地理学は間口の広い学問です。色々な事柄を学び、その繋がりを考えます。自然災害など地球環境について、世界や日本の地域性に関して、あるいは歴史・経済・文化なども対象となります。その多様な視点から、身近な疑問や地球規模の疑問まで、解き明かすことができる魅力的な学問です。奈良大学の地理学科には様々な専門の地理学者がいるため、地理学を思いきり学ぶことができます。

ぜひ西日本最大級の「地理学科」で地理学の真髄を学び、私たちの暮らす“地球”や“地域”にたくさん興味を持って、人生をどんどん楽しくしてもらいたいと思います。

ゼミ生からのメッセージ

芝田先生は自然地理学や地理情報科学を専門とされていますが、学生の興味がある分野は自然・人文問わず指導されています。私は外来植物の研究をしていますが、その際にどのような研究方法があるか事例を紹介してくださるので、より良い結果が得られます。

さらに就職活動に関するサポートも手厚く、私は奈良大学と交流の深い企業のもとで先生の推薦でアルバイトをさせていただき、大学の講義だけでは得られない貴重な経験をさせていただけることも魅力です。

3年生 門川 和人 さん (出身校:日本大学第一高等学校)



奈良大学
NARA UNIVERSITY

ならぶ
Na Love

Nara
University
Bulletin Vol. 198

ならぶ Vol.198 ●発行:令和8年2月 ●発行:奈良大学 〒631-8502 奈良市山腰町1500 TEL. 0742-44-1251(代) URL <https://www.nara-u.ac.jp/> E-mail kouhou@agaki.nara-u.ac.jp ●編集:奈良大学入試広報センター



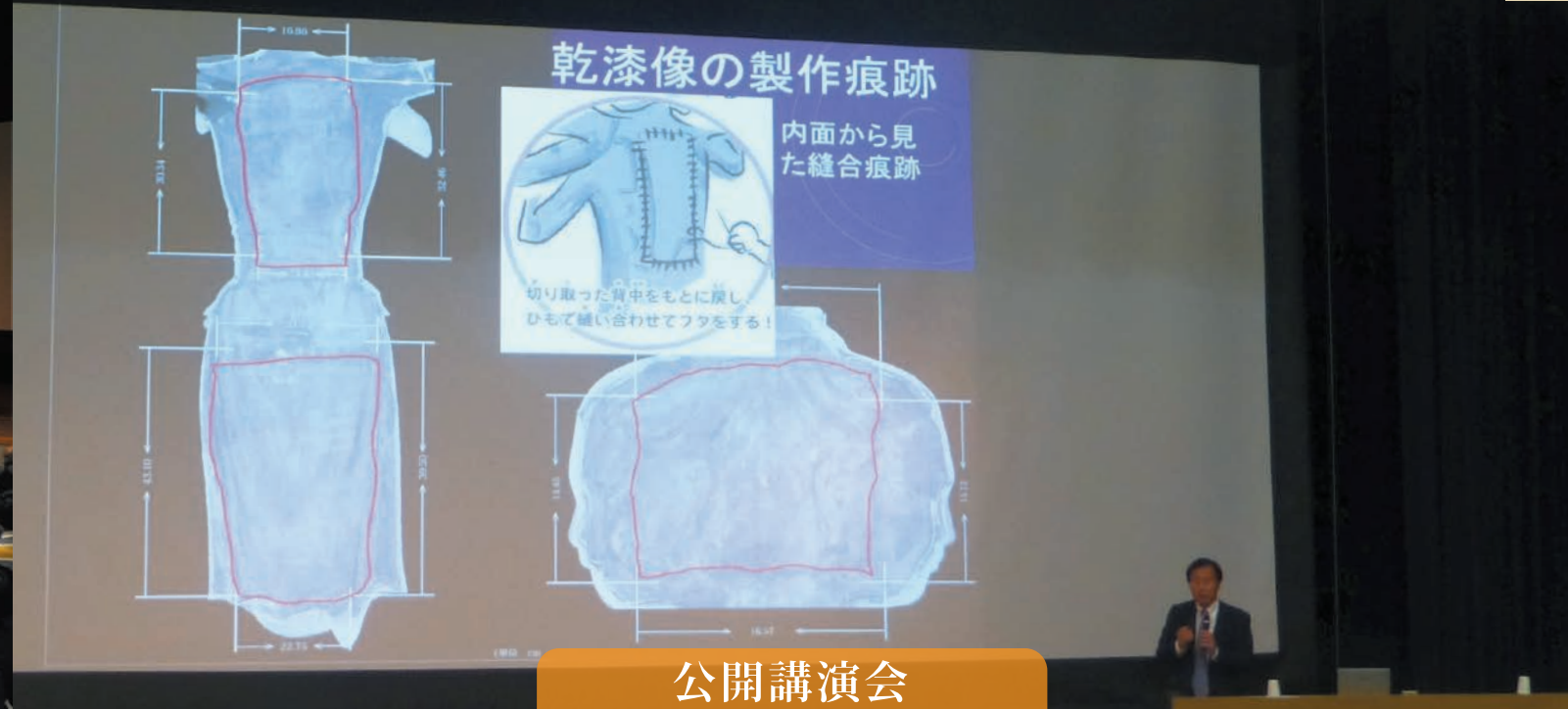
学校法人奈良大学創立100周年事業の一環として、5月に公開国際シンポジウムを、7月には公開講演会を開催し、多くの方にご参加いただきました。

公開国際シンポジウム

5月31日(土)、これまでのモンゴルをはじめとする国際的な調査研究を踏まえ、公開国際シンポジウム「国境を越えた研究者への道 ― シルクロードと奈良をつなぐ奈良大学の人材育成 ―」を開催しました。冒頭には、学校法人奈良大学浅川正美理事長、来賓のモンゴル国立文化遺産センターのガルバダラフ・エンフバト所長による挨拶の後、モンゴルの民族楽器「馬頭琴」の演奏や歌唱、民族舞踊が披露され、国際交流の場にふさわしい華やかな幕開けとなりました。

続いて、史学科の宮本亮一准教授、総合社会学科の正司哲朗教授、千田嘉博特別教授による講演が行われ、モンゴルでの発掘調査が学生にとって研究者としての訓練の場になったことが報告されるとともに、シルクロードという語が近代研究者による造語であること、唐から伝来した“ものさし”が平城京の設計に活用されたことなど、歴史と文化を結ぶ具体的な事例が紹介されました。

シンポジウム後半には、今津節生学長の司会で「奈良大学から育った若きシルクロード研究者」をテーマに卒業生研究者が発表を行いました。モンゴル国立文化遺産センターのメンドバザル・オユントルガ氏、東北芸術工科大学准教授の村上智見氏、別府大学准教授の柳成煜氏が登壇しました。3名の登壇は、奈良大学で培った「好きなことを追いかける学び」が、世界で活躍する研究者としての成長へとつながることを示す事例となりました。



公開講演会

7月13日(日)、公開講演会「阿修羅のひみつ 一天平の至宝を未来につなぐー」を開催しました。今津節生学長が長年にわたり興福寺と協力して取り組んできた阿修羅像の科学的調査研究に基づくものです。開会に先立ち、奈良大学雅楽研究会による管弦の演奏が披露されました。曲目は「陪臚(ばいろ)」で、東大寺の大仏開眼の際にも奏でられた歴史的な楽曲です。天平文化を象徴する阿修羅像をテーマとする本講演会にふさわしい幕開けとなりました。続いて、学校法人奈良大学浅川正美理事長が挨拶を行い、日本文化の淵源の地である奈良において、本学が教育研究を通じて次世代の人材育成に取り組む使命を述べました。

前半には、まず、興福寺の森谷英俊貫主が「阿修羅の来歴」をテーマに、阿修羅に宿る深遠な仏教的背景を解説してくださいました。次に、通信教育部長の渡辺晃宏史学科教授が「興福寺と光明皇后」と題し、光明皇后が仏教普及に尽力した事例を紹介しました。

後半には、今津節生学長と、今津学長の指導のもと大学院博士後期課程の学生として研究を続けている奈良国立博物館学芸部アソシエイトフェロー加藤沙弥さんが「X線CTが捉えた1300年の新事実」をテーマに、国宝・阿修羅像に関する調査・研究の成果を発表しました。調査の結果、阿修羅像の内部には現在の顔よりも厳しい表情を持つ別の顔が存在することを科学的眼で明らかにしました。そして、元本学講師の山崎隆之愛知県立芸術大学名誉教授が「乾漆像の内面に隠れた顔から推理する制作者の意図」と題し、表情が修正された背景には作者の意図や仏教の經典の要素が反映されている可能性を解き明かしてくださいました。

今回の講演会は文化財が過去の記憶を未来へとつなぐ人類の財産であることを改めて胸に刻み、科学と文化の融合が拓く新たな研究の可能性を共有する場となりました。



体験講義「阿波人形浄瑠璃の講義と実演」を開催しました



国文学科では文学作品や日本語だけでなく、日本の文化についても学びを深めます。12月9日(火)には、国文学科の体験講義「阿波人形浄瑠璃の講義と実演」を開催しました。阿波人形浄瑠璃は、徳島県の各地に伝承されている義太夫節による三人遣いの人形芝居で、各地の神社の境内に建てられた農村舞台で奉納芸として上演されてきました。

当日の講義では、徳島県立阿波十郎兵衛屋敷の佐藤憲治館長より、人形浄瑠璃の特色、徳島に多くある農村舞台の説明、人形浄瑠璃をはぐくんだ徳島の風土のご説明をいただきました。

続いて、竹本友和嘉太夫(重要無形文化財「義太夫節」総合認定保持者)による三味線と義太夫節の実演が行われました。鈴の音や合戦の音を三味線で奏でられ、それぞれの音色の違いを体感しました。また、義太夫節では、座り方、声の出し方や節回しの技法の説明・実演のあと、「傾城阿波の鳴門」の一節を会場の参加者とともに声に出して語りました。

講義の最後には、人形座のみなさんから人形の動かし方の説明を受けたあと、学生が実際に人形を操って動かす人形遣いの体験も行いました。体験に参加した学生たちは講義時間終了後も熱心に人形を動かし続け、人形の手足が動くたびに声を上げて感動していました。

人形浄瑠璃は、太夫の語り、三味線、人形を操る三人の遣い手が息を合わせることで、登場人物の心情が細やかに表現されます。今回の体験講義では、阿波人形浄瑠璃のおもしろさを、存分に味わうことができました。

文学部国文学科
杉本 康浩さん
(金光藤蔭高等学校出身)



義太夫を務めている方の講義で、性別や演じる役の種類によって声を使い分け、またシーンによっても話すスピードや声色を変えていると語っておられました。話すことひとつを取っても幾重にも技術が敷き詰められており、日本の伝統文化の真髄を感じました。講義の最後に人形浄瑠璃で使う人形に触らせて頂ける機会がありました。全てが木で出来たカラクリによって操作されており、ここでも人形職人とそれを扱う黒子の方々の技巧の高さを実感し、人形浄瑠璃とは職人達の技術によって完成する芸術であると再確認しました。

2025年度第1回バスツアーで 恭仁宮跡・紫香楽宮跡・近江国庁跡・建部大社・石山寺を見学



奈良大学文学部史学科では10月19日(日)に、2025年度第1回バスツアーで恭仁宮跡・紫香楽宮跡・近江国庁跡・建部大社・石山寺を見学しました。明け方の雨もなんとか止んで、古代の遺跡を中心に、無事秋の遠足を楽しむことができました。

秋桜の美しい恭仁宮では、藤原宮から平城宮を経て恭仁宮へと2度移築され、最後は山背国分寺金堂となる大極殿の基壇に立ち、礎石がよく残る国分寺塔跡を見た後、くにのみや学習館を訪ねて、文字瓦などの遺物を見ました。

次に宇治田原を経由して紫香楽宮に向かい、信楽のたぬきを横目に盆地北端の宮町遺跡を訪ねました。宮町遺跡展示室で、甲賀市教育委員会の渡部圭一郎さんから説明を受け、発掘成果に基づく紫香楽宮跡復元についてのDVDを視聴しました。宮町遺跡の木簡の実物も見せていただき感激しました。その後、紫香楽宮跡の故地である宮町遺跡で往時を偲んだ後、当初紫香楽宮跡とされていた甲賀寺跡を訪ねて見学し、ここで昼食を取りました。

午後はまず、中世に近江一宮として栄えた建部大社を参拝し、その東に展開する近江国庁跡で、復元された基壇を見ながら、広大な遺跡を回りました。建部大社では、宮司さんから神社についての説明も受けました。

最後に瀬田川対岸の石山寺を訪ね、まず整備の終わった多宝塔の脇を通って山上の豊浄殿まで登り、「石山寺と紫式部展」を参観したあと、本堂を参拝しました。その後京奈和道を一路奈良に向かい、無事全行程を終えました。

文学部史学科
中原 正悟さん
(愛媛県立今治東中等教育学校出身)



私は中世の争いについて興味を持っていますが、今回の見学先は日本古代史に関わる史跡でした。

最も興味のある時代ではないですが、先生にご説明いただきながら見学できる機会は大変貴重であり、また、実際に現地へ行くことで自分の中で新たな発見があると思い参加しました。

今ではのどかな田園風景が広がっていますが、自分の目で見て実際に歩く事でその広さと歴史を実感できました。

また、聖武天皇が初めて大仏を作ろうとした場所であることも今回初めて知り、新たな発見ばかりの見学会となりました。

地理学科(土平ゼミ)地域調査実習



3年次土平ゼミでは、8月31日(日)～9月3日(水)に砺波平野と五箇山で長期野外調査実習(大巡検)を実施しました。

砺波平野には、奈良盆地の集村景観と対比的な散居村の景観がみられます。地理の知識としてもちつつも、現地に行くと想像以上の印象的な景観が目に入ってきます。少し知識と異なる点も認識しました。砺波平野の中央部にみられる高速道路と主要道路の結節地区では、配送センター、ロードサイド型店舗などがみられました。地形図等の判読だけで理解しがたい地域空間を感じ取りました。

チューリップ公園は砺波市のチューリップ球根生産の象徴といえますが、訪問したこの季節から想像しづらいものとなりました。むしろ、季節によって地域の様相が全て異なることに驚き、かえて良い経験になりました。園内にあるチューリップ四季彩館では、チューリップ栽培の発達史、促成栽培や抑制栽培の再認識など、現地で学ぶ地理学となりました。学生からは最盛期に「再度の訪問してみたい」の言葉がでした。

世界遺産として知られる五箇山は、砺波平野に隣接する地域とはいえ、山を境にしているため、景観が全く異なります。わずか20分ほどの車移動で一変する景色は圧巻です。菅沼集落では合掌作り集落を間近でみながら、近世の焰硝生産の仕組みを理解し、加賀藩の政策との関係を知りました。相倉集落では、複数の中学生が学校から帰宅する姿をみて高齢化の集落という先入観が崩れました。2つの集落とも、外観は合掌造りとはいえ、宿泊や土産販売など観光に携わる地元の生活を垣間見ることができました。

後半の日程では、加能越鉄道廃線跡の土地利用、農業用水路、井波門前集落と雪害、富山城下町について、各自設定したテーマで現地調査実習を進め、秋には調査結果をまとめました。

文学部地理学科
東田 怜さん
(奈良県立添上高等学校出身)



今回は富山県に行ってきました。五箇山の合掌造り集落や、今回の私の研究地域であった南砺市井波町はすごく印象に残っています。五箇山では現地に住んでいる生徒さんを見る、といった貴重な体験もでき、彫刻で有名な井波町では町のあらゆる場所で精巧な彫刻を見ることができました。道中では、車で移動をしていましたが、景色を見るときれいな青空と緑豊かな自然があり、そしてそこに広がる神秘的な川もかなり印象に残っています。

画像で見ただけではわからないことや、実際に現地に行ってみることでしか出会えない貴重な体験ができました。

学生とともに大阪府泉南市長慶寺の秘仏本尊像を調査！



文化財学科では教員がそれぞれの専門性を活かし、地域における文化財調査に積極的に関わっています。昨年9月には大阪府泉南市の長慶寺にて仏像調査を行い、大河内教授の指導のもと、学部生や大学院生あわせて12人が参加しました。

調査では本堂の中に写場を組んで撮影を行うとともに、寸法を測ったり、表現の特徴や構造、技法を把握して、制作年代を判断し記録を取っていく作業を行いました。大阪府や泉南市の文化財担当職員、大阪市立美術館やなら歴史芸術文化村の学芸員も参加し、専門家と学生が接する機会となりました。

今回、長慶寺の秘仏本尊である如意輪観音坐像について、初めて学術調査を行うことができました。像高89.1cmの等身大の姿で、腕を六本あrawし片膝を立てて座る姿に表されています。寄木造で細かな木材をつなぎ合わせるやや複雑な構造で、素木仕上げとしています。背中に墨書があり、それによって慶長3年(1598)、道故という仏師によって造像されたこと、願主が河村久目入道宗悦という人物であることが分かりました。河村久目は豊田秀吉の馬廻衆であったようで、前年には四天王寺に當麻曼荼羅と曼荼羅堂を寄進しています(ともに京都府・永観堂禅林寺に現存)。本像造像の経緯も、豊臣氏周辺の動きと連動するのかもしれません。桃山時代の重要な新資料の発見となりました。

文化財調査が初めての学生も、仏像の移動や清掃、計測などを積極的に行っていました。調査を通じて、一人一人が文化財を未来へと継承していくための当事者であることを感じてくれたものと思います。

文学部文化財学科
市野 初帆さん
(名鉄学園 杜若高等学校出身)



今回の調査では、仏像の移動や撮影時の計測に補助として関わりました。初めは緊張して資料に触れることに躊躇ってしまいましたが、大河内先生や院生の方々に声をかけていただき、次第に調査に打ち解けることができました。資料調査の重要性を実感し、専門職を目指す私にとって重要な経験になりました。また、調査には周囲の仏具に気を配り移動する場面など平常心を保つことが必要になるので、日常生活でも心がけることが今後の成長になると感じました。

地域臨床実践研究会の恒例イベント「ならぼー」を実施しました



8月1日(金)に、心理学科の学生や社会学研究科の院生が中心となって行っている「地域臨床実践研究会」(代表:心理学科 磯部美也子教授<専門:発達臨床心理学、言語発達障害学>)の夏の恒例イベント「ならぼー」(奈良大×大冒険)を開催し、30名近くの子どもたちが遊びに来てくれました。

このイベントは地域交流の一環として行っており、これまでに引き続いて、放課後等デイサービス「コラソン」の皆様にご協力いただきました。さらに、今年度は新たに放課後等デイサービス「クローバー」の皆様にもご協力いただきました。

開催日までに何回もミーティングを行いました。まずは学生同士が交流を深めるところから始めて、次に、子どもたちとどのような遊びをするか学生自身で企画を立てて、リハーサルを行うなど準備を積み重ねてきました。当日は、自己紹介ゲームをした後、子どもたちと学生がグループに分かれて構内を探検しながら、魚釣り、間違い探し、的当て、毛糸を使った制作、巨大ジェンガといったゲームをプレイし、最後にピニャータという、お祝い事などで使われる遊びを全員で行いました。

準備作業においては、思うように進まずに頭を悩ませる場面も見られましたが、当日の子どもたちの笑顔を見て、ほっと胸をなでおろしたり、嬉しくなったりした学生も多かったのではないかと思います。振り返りを丁寧に行い、これからも活動を続けてまいります。「地域臨床実践研究会」ではボランティア活動の推進などを行っており、他学部・他学科の学生も参加できます。

社会学部心理学科
泉岡 稜青さん
(奈良県立五條高等学校出身)



私は「ならぼー」で、準備期間に牛乳パックで巨大ジェンガを作り、当日は子どもたちと一緒に様々な遊びを周って楽しみました。自分が時間をかけて準備した巨大ジェンガを、子どもたちが楽しんでくれた時は、とても嬉しかったです。

今回は、子どもたちに楽しかった体験と、思い出として形に残るものを精一杯準備しました。参加していただいた子ども達が、「ならぼー」での体験と思い出が、これからの日々の良いものとして繋がれば嬉しいです。

社会学部卒業生を対象としたウェブ調査を実施



このたび、社会学部の卒業生(2005年3月~2012年3月ご卒業)の皆さまに、総合社会学科の授業「社会調査実習」(担当:吉村・正司)で行ったウェブ調査「コロナ禍の生活に関する実態調査」へのご協力をお願いしました。お忙しい中、11月17日(月)~12月1日(月)の短い期間にもかかわらず、多くの方がご回答くださり、心より感謝申し上げます。

「社会調査実習」は、現代社会の課題をみつけ、自分たちで調査をつくり上げていく授業です。テーマ設定にはじまり、調査票づくり、画面デザイン、個人情報の取り扱い方、ウェブサーバ準備、セキュリティ対策、データ分析、報告書づくりまで、ひとつの調査に必要な工程を学生たちはお互いに協力しながら学んでいきます。

2025年度は、「コロナ禍が生活や気持ち、働き方や家計、人とのつながりにどんな影響を与えたのか」「終息後、暮らしがどう変わったのか」を明らかにするため、卒業生の皆さまにご協力をお願いしました。学生たちは、一通ずつ封筒に切手を貼り、依頼文を封入して1000通を準備しました。現在は、皆さまからいただいた回答データをもとに、それぞれの視点でデータ分析を進めております。

卒業されてから時間が経っても、このように学生の学びを支えてくださり、本当にありがとうございます。皆さまからのあたたかいご協力は、学生にも教員にも大きな励ましとなっております。これからも奈良大学をそっと見守っていただければ幸いです。

社会学部総合社会学科
橋本 歩実さん
(暁星国際高等学校出身)



アメリカ留学中、目的や活用方法が明確に示されたオンライン調査に触れ、回答者が尊重される調査のあり方を実感しました。一方、日本では意見の活かせられ方が見えにくい場面もあり、その違いから社会調査実習を履修しました。授業では調査設計や統計分析を学び、調査結果を社会の改善に役立てる重要性を強く感じています。また、データが人々の生活を支える基盤になることも実感しました。将来は、人々の声を確かな形で社会に反映できる人材を目指しています。

多様な考え方や取組みに 啓発されています

在学生 広瀬 治男 さん

会社を退職後、奈良大学の通信教育があることを知り、文化財歴史学科に三年次編入学しました。高校の日本史の最初の授業では、校庭脇にある縄文時代の竪穴住居跡の見学があり、その時の考古学研究の楽しさの話に触発されて、歴史のクラブに入ることにしました。クラブでは毎年夏に、大学の考古学研究室の方々の指導のもと、千葉県の大塚の発掘をおこない、出土品の整理をしていた経験もあることから、考古学をはじめ、大学で学んだことについて、改めて学び直したいと思ったのが入学のきっかけです。

年度初めに多くのテキストが送られてくると、難易度を見込んで取り組む順を決め、近所の図書館や、時には国会図書館にも足を伸ばして、レポート作成のための資料を閲覧しました。レポートの作成は苦しみよりも、知識を拡げることの楽しさがありました。提出レポートが不合格で返却されることもありましたが、再度調べると調査不足や考え違いに気付かされたこともあり、かえって充実できたように思います。

入学前には東海道を日本橋から写真の三条大橋まで江戸の昔を偲びながら歩き、中山道、甲州街道にも挑戦しましたが、その時に興味を持った街道脇の秋葉燈籠や、甲府近辺に見られる丸石を積んだ塚は、民俗学や文化人類学のレポートのテーマとなり、江戸の人々の信仰心の一端を知ることができたと思います。街道の各宿の佇まいは、今でも昔を偲ぶことができ、宿場の史的考察は卒業論文として役立つことになりました。

スクーリングでは、先生方の熱の籠もった博識の講義や、グループの皆さんの多様な考え方や取組みに啓発されることが多く、奈良の寺社や古墳巡りも楽しむことができ、充実した時間を過ごしています。



通信教育部生 便り

解像度を上げてくれた奈良大学での学び ～歴史を伝える風景の中に身をおいて感じること～

卒業生 井崎 宏子 さん

50代半ばの頃、人生でやり残したことは何かと考えたとき、その答えが「学び」でした。早く経済的自立を果たしたかった20代の学生時代とは違い、大人ならではの「学ぶ楽しみ」を存分に味わいたいというのが奈良大学入学の動機でした。

私の卒業論文のテーマは仏像。在学3年のうち後半2年はコロナ禍で、スクーリングが在宅となり、図書館・博物館での資料収集や現地調査も制限されるなど、卒業研究には困難な状況でしたが、それも今では懐かしい思い出です。

卒業後は、卒業論文で扱ったさまざまな仏像を観るため、東京、鎌倉、伊豆、京都、奈良など各地を訪れました。奈良国立博物館・京都国立博物館・大阪市立美術館三館での「国宝展」でも多くの仏像を鑑賞できました。

仏像を観ているうち、図録で見た時と印象の異なる仏像があり、その違いが「眼」にあることに気づきました。カメラのレンズが捉えた対象物と人間の肉眼に映るそれとで、仏像の眼差しや表情がこれほど異なるとは、図録だけでは判らないことでした。

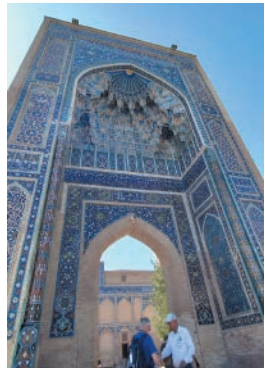
10代の頃から憧れ続けたシルクロード。敦煌莫高窟やベゼクリク千仏洞で観た、大谷探検隊を含む各国の探検隊が剥ぎ取った壁画の痕跡からは、文化財保護に対する重い教訓が伝わってくるようでした。

サマルカンドではイスラム建築の圧倒的な美しさを知り、モンゴルではチンギス・ハンらが駆けた草原と遊牧民の暮らしぶりに触れ、また北京では、唯一中国皇帝のみに許された「五爪の龍」（日本に遺る龍は四爪もしくは三爪）を観ることができました。

歴史を伝える風景の中に身をおき現物を鑑賞するとき、奈良大学での学びが理解の解像度を大きく上げ、さらに広く深い探求に繋がっていることを実感します。



トルファンにてウイグル族の少女と



チムールが眠るグリ・アミール廟（サマルカンド）

トピックス

7月

July

7日

「奈良文化論」で 雅楽演奏会を開催

「奈良文化論」は数十年続く人気講義です。今年度は「奈良の文化と伝統芸能」をテーマに、大仏開眼供養会の芸能や、特に神事芸能としてもよく知られている雅楽を中心に芸能の発展について学びます。

7月4日（金）の講義では奈良大学雅楽研究会による演奏会が行われ、現役生、三和会（卒業生の会）の皆さんとともに、本講義の講師で公益社団法人南都楽所の指導役を務められる笠置慎一先生にも演奏していただきました。会場では、奈良文化論受講者以外の学生や教職員も聴講して、世界最古のオーケストラと呼ばれる雅楽の演奏会を堪能していました。

演奏会後には、雅楽研究会部員による楽器解説や楽器に触れられる体験会が行われ、参加した交換留学生も初めて見る楽器に興味深く見入っていました。



30日

ふるさと納税で 奈良大学を応援できます

奈良大学と奈良市は7月30日（水）に「ふるさと納税を活用した大学・学生と地域の連携強化に関する協定」を締結しました。これにより、奈良市ふるさと納税の寄附先として奈良大学を選んでもいただけます。

寄附金は、地域をフィールドにした学びや調査研究、学生生活のサポートなどに活用させていただきます。

返礼品には学生食堂の食券を選ぶことができます。ご自身で利用するほか在学生へのプレゼントも可能です。学生食堂の食券が返礼品になるのは全国的にも珍しい取り組みです。

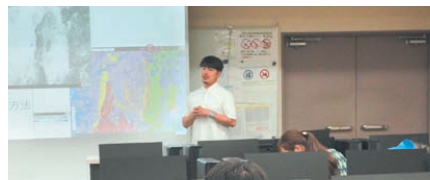
返礼品を辞退された場合は、寄附金の80%が奈良大学の支援に充てられます。奈良市民の方も対象です。

▶詳しい内容は
右記QRより
ご覧ください。



30日

中学校・高等学校の先生方を 対象に「地理授業へのGIS （地理情報システム）の導入例 と簡単な実習」を実施



高等学校での必修科目である「地理総合」は、地図やGISを用いて効果的に調べる技能の習得を主な目的としており、指導する地歴科目教員からのGISに対する需要が高まっています。

地理学科では長年、教育と研究の両面で地理情報システムを活用しており、沿岸部の浸水と避難施設についての調査や、国土地理院主催のコンテストに入賞するなど、様々な場面で結果を残しています。

さらに毎年、地理学科の教員が講師となって「学校教員研究支援オープン講座」を開講しており、今年度は地理院地図の使用方法和主題図の作成方法について紹介を行いました。

当日の講座では、前半は地理総合の教科書にも登場するWebGISサービスである「地理院地図」の使用方を学び、後半には、インターネット上で地域統計のデータを地図化できるWebGISにより、自分で用意した統計データを地図化する方法などを学びました。

8月 August

13日 奈良市の「学生支援事業補助金」に2つの事業が採択



奈良市の「令和7年度 奈良市地域に飛び出す学生支援事業補助金」の対象として、奈良大学の学生の事業2件が採択されました。

一つは、社会学部心理学科生有志から成る「奈良大学心理学科 Again」による「若者の生きる意欲を支えるゲートキーパー活動」です。若者の生きづらさの原因を調査し、シンポジウムなどを通じて理解を広げる取り組みを進めています。

そして、奈良大学の学生が主体となり、市内7大学の学生有志とともに活動するインカレ団体「平城半神話大系製作委員会」の活動も採択されました。この団体は奈良のまちを活性化するため、「奈良市七大学合同文化祭「平城半神話大系」」を計画し、11月末に平城宮跡歴史公園での開催を実現しました。奈良市からも地域活

性化の起爆剤として大きな期待を寄せられています。

10月 October

3日 日本女性会議2025橿原に本学教員と学生が参加

「日本国はじまりの地から未来へ」のテーマのもと奈良県橿原市で開催された「第40回 日本女性会議2025 橿原」において本学教員2名が実行委員を務め、分科会等にも本学教員4名と学生が登壇しました。

島本太香子副学長（総合社会学科教授：女性医学・男女共同参画・ジェンダー生理学）は実行副委員長を務め、企画運営の中心的役割を果たしました。また、複数の分科会にも登壇して進行を担当しました。史学科の渡辺晃宏教授（日本古代史）と国文学科の鈴木喬准教授（上代文学）は、それぞれの研究を通じて古代の女性像に迫る講演を行い、参加者の関心を集めました。心理学科の林郷子教授（臨床心理学）は、子どもの支援をテーマにした分科会でコーディネーターを務めました。

学生も活躍してくれました。イベント「1dayジェンカレ in 日本女性会議2025」の参加者を代表して4名の学生がパネリストとして登壇し、本学の文化財学科1年・岩元優芽さんが、ジェンダーと健康をテーマ

に発表しました。また、国文学科と総合社会学科の学生が受付や会場案内などを担当しました。天平時代の衣装を着た国文学科の学生は、全国からの来場者を笑顔でお迎えし、好評を博しました。



19日 「教育のつどい」開催

在学生の父母等で構成される奈良大学後援会と奈良大学の共催による「教育のつどい」が、9月21日の東京をはじめ、岡山（10月12日）、奈良（10月19日）の3会場で行われました。

本学会場では、地理学科の土平博教授（歴史地理学）による講演「西の京薬師寺と伊能測量」、キャリアセンターによる説明会のほか、学生食堂での昼食をはさみ個別懇談会を実施し、たくさんの在学生のご家族にご参加いただきました。

奈良大学では、父母等の皆様とも連携しつつ在学生の皆さんの学生生活を支援しています。

11月 November

2日 第56回青垣祭を開催



11月2日（日）、3日（月・祝）の2日間、大学祭「青垣祭」を開催しました。連休での開催とあって、近隣にお住まいの方々や卒業生など多くの方にご参加いただきました。2日間に渡って、クラブ、サークル、学科ゼミなどの各団体による模擬店や公演・展示発表のほか、移動動物園、青果市が行われました。今年が初めてとなる縁日も開かれ、特に小さな子どもたちに大人気でした。また、メインステージではビンゴ大会などの参加者も一緒に楽しめるイベントが行われました。

2日目には、3ピースバンド「berry meet」によるプロコンサートが実施され、観客は爽やかな演奏に魅了されていました。

2日目の日中には雨に見舞われましたが、担当した学生たちは皆で協力して対応していました。来年度の開催を楽しみにお待ちください。

3日 ホームカミングデーを開催

11月3日（月・祝）にホームカミン

グデーを開催しました。

今回は33期、34期、43期、46期、48期、50期、51期、52期の卒業生の皆様に大学へご招待して今津節生学長（保存科学、文化財学）による講演「阿修羅像への想い」を開催しました。

また、卒業生教育職員懇話会も同日開催され、日本各地の学校で活躍する卒業生が来学して、親睦を深めました。

当日は大学祭「青垣祭」の開催日で、卒業生の皆様には後輩たちの展示や模擬店、公演などをお楽しみいただきました。



10日 文化財学科の学生が「一日文化財保安官」に

文化財学科3年生の市野さんと安野さんが、奈良県警察本部から委嘱を受け、「一日文化財保安官」として文化財の防犯啓発活動を行いました。

「一日文化財保安官」は文化財学科の学生が、全国で唯一奈良県警に配置されている「文化財保安官」とともに県内の寺社をパトロールする防犯啓発活動で、文化財学を学ぶ本学生に相応しい企画といえます。

11年目となる今年は、文化財学科の大河内智之教授（日本美術史・日本彫刻史・文化財防犯）が奈良県警から協力依頼を受け、市野さんと安野さんが委嘱式に出席しました。式典後、二人は警察官の制服に身を包み、文化財保安官とともに秋篠寺（奈良市）と長弓寺（生駒市）を訪問しました。両山とも国宝を所有する名刹です。なお、秋篠寺では奈良大学の学部生・大学院生が複数名アルバイトでお世話になっています。

学生たちは、ご住職など関係者から防犯対策について説明を受けるとともに、夜間の警備体制や文化財のリスト作成などについて積極的に質問を行い、「一日文化財保安官」としての役割をしっかりと果たしました。

また、奈良市消防局の文化財防災官も同行し、防犯・防災の両面から啓発活動を展開しました。



■ クローズアップ 地歴甲子園-全国高校生歴史フォーラム



11月22日(土)・23日(日・祝)に「地歴甲子園-全国高校生歴史フォーラム」を開催しました。19回目となる今回は69校86編のレポートから、優秀賞5編、佳作6編が選ばれ、1日目には奈良大学令和館において、優秀賞受賞者、佳作選出者による研究発表会と表彰式が行われました。学長賞は2年連続で駒場東邦高等学校の伊藤さんが受賞しました。2日目には地理学科の岩崎敬二教授の解説で猿沢池周辺や登大路園地を散策した後、文化財学科の米屋優教授や岩戸晶子教授など複数教員の解説で東大寺や周辺の発掘現場などを見学しました。特に東大寺大仏殿では、「特別登壇」で大仏様のお膝元まで登ることができ、参加した高校生たちはお膝の文様などに驚きと感動を隠せない様子でした。次年度の開催日は2026年11月28日(土)・29日(日)の予定です。



優秀賞受賞者のみなさん

＜地歴甲子園-全国高校生歴史フォーラムについて＞

「歴史や文化、地理、文化財、文学、人物、社会」をテーマとして、全国の高校生に、自ら設定した課題について調べ、考察し、探究していく研究の楽しさを実感してもらうことを目的として開催しています。



地歴甲子園-全国高校生歴史フォーラムの
HPへのリンクは上記QRコードより



2日目の奈良観光の様子

審査結果

優秀賞・学長賞

駒場東邦高等学校(東京都) 伊藤拓生

八王子城における石垣構造とその背景
－実測分析から見る北条氏の築城思想－

優秀賞・知事賞

高知県立高知国際高等学校 澤田千代子

安政南海地震後に建てられた萩谷名号碑の碑文は、
どれだけ信用性があるか

優秀賞・優秀発表賞

長崎県立杵崎高等学校 東アジア歴史・中国語コース

2年 歴史学専攻 宮野幸一

杵崎中世史解明の新視点－誰が生池城を改修したか－



優秀賞

岐阜県立関高等学校 地域研究部

酒向絆叶・小栗千佳・林信之介・小森渚・山根優

船野城と津保・郡上の抗争～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐる何が起きたか～

筑波大学附属坂戸高等学校(埼玉県) 梶野拓夢

越辺川の河床遺跡を検討する

－新発見の越辺川吹塚西袋町A 地区A1・A2地点河床遺跡を中心として－

佳作

福島県立磐城桜が丘高等学校 大淵絢慎

沈船防波堤の戦争遺跡としての価値 ～小名浜港の沈船防波堤を論じて～

昌平中学・高等学校(埼玉県)社会歴史研究部 阿久津勇気、小野将太

杉戸町関連戦没者全記録 ～5冊の『戦没者名簿』をひもとく～

豊島岡女子学園高等学校(東京都) 松木雛子

川越における十組仲間の解釈

長野県諏訪清陵高等学校 平田翔太郎

天守の比較から考える「高島城天守」の存在意義

天王寺学園高等学校(大阪府) 宮城龍斗

三好実休の肖像 ～二つの肖像画の謎～

愛媛県立松山北高等学校 郷土研究部 森川晴仁、岸本美花、藤井初佳、

森貞裕太郎、谷口凱星、山住悠理、安部大晟、對馬小花、松本知隼

衛門三郎伝承と河野教通 ～四国遍路(伊予)をつくった戦国大名～

※敬称略

■ インフォメーション

■ 教員著書紹介

◆古代・中世キリスト教における女性イメージ

史学科教授 足立広明 共著、教文館

2025年7月刊行

◆人権を読み解くキーワード・1

史学科教授 奥本武裕 共著、(一財)奈良人権部落解放研究所

2025年7月刊行

◆帝国の隠し方：大アメリカ合衆国の歴史

史学科教授 高橋博子 共訳、名古屋大学出版会

2025年7月刊行

◆生活存立の比較史

史学科教授 木下光生 共著、東京大学出版会

2025年9月刊行

附属高等学校

100周年記念講演会『面白く生きよう』

11月20日(木)に奈良大学講堂で薬師寺副住職の大谷徹英氏を講師に迎え、100周年記念講演会が実施されました。講演の冒頭、大谷氏は会場の生徒たちに「あいさつは、相手に“出会えて嬉しい”という気持ち伝える行為です」と語りかけられ、会場には大きなあいさつの声が響きわたりました。大谷氏は、舞台上上がった生徒たちと交流しながら、「物事を面倒と感じるか、面白いと感じるかは自分の受け止め方次第」、「命を運ぶと書いて運命、その運転手は自分」など、自分の人生を自らの力で責任を持って切り拓いていくことの大切さを語られました。生徒たちは、大谷氏のユーモアを交えつつも、心に響く力強い語りに聞き入っていました。「生きること」について改めて向き合う時間となったようです。



◆社会調査における非標本誤差 新装版

総合社会学科教授 吉村治正 著、東信堂

2025年9月刊行

◆シルクロードの宗教 1

史学科准教授 宮本亮一 共著、帝京大学出版会

2025年10月刊行

◆民法.7 第8版

元奈良大学教授、奈良大学特別研究員 床谷文雄 共著、

有斐閣アルマ 2025年11月刊行

◆秀吉と豊臣一族研究の最前線

史学科教授 河内将芳 著、山川出版社

2025年12月刊行

附属幼稚園

地域の方にお礼に行く

年中すずらん組の子どもたちが、勤労感謝の日に合わせて交番を訪問し、地域の方への「ありがとう」を伝えました。交番では「どうしておまわりさんになったの?」「悪い人を捕まえたことはある?」などの質問をし、おまわりさんは「みんなを守りたいからだよ」と優しく答えてくださいました。特別にパトカーにも乗せてもらい、サイレンや赤色灯の仕組み、奈良県に1台しかない特別なパトカーについても教えていただき、子どもたちは興味津々。最後には交通ルールに関する質問にも元気に答え、記念撮影と感謝のお手紙を渡しました。地域への感謝と安全に過ごす大切さを学ぶ貴重な時間となりました。

